



^ 13
2921
1



本政

門 へ 13
號 2921
巻 1

昭和九年
七月六日
請求

池の邊に東頭土堤の相風度く
 解下紐をわらわん家の梅北
 面中田圃の雪動くやうざの園
 の中おぎま南枝花好く園の廊の初
 紋日たの庭焼れをいしり庭の通
 神代り春の謂ぐ昔の初買の人集

と昔も初衣装の要りぬに
若者の着
色を倉々梅の花の
料が急で初仕
好の賑々や
相由に
春色を
整ふ一
か
表は
春風
花
連
直才の蛤大黒舞
一時
舞華
多
連理の
花
其
比
羅
の
島

追
神
活
筋
か
大
門
口
自然の
草
花
水
乃
尻
ま
曲
輪
の
色
の
大
極
上
代
江
口
神
の
野
草
如
白
女
槍
垣
の
全
盛
も
遠
に
海
の
時
は
曲
の
あ
る
あ
る
春
の
細
身
玉
名
宮
を
あ
る
あ
る

家^{いへ}の^{まへ}松^{まつ}の^の木^き後^{のち}あ^らわ^せら^れお^のら^せら^れ
お^のら^せら^れあ^らわ^せら^れら^れ

○
右^{みぎ}の^の序^{しり}文^{ぶん}今^{いま}ら^う廿^に余^{じゆ}年^{ねん}の^の最^{さい}末^{まつ}なり
し^し戊^ご寅^{いん}春^{しゅん}正^{せい}月^{げつ}五^ご日^{にち}の^の松^{まつ}の^の序^{しり}文^{ぶん}
子^こ故^こ人^{にん}本^{ほん}丁^{てい}庵^{あん}三^{さん}属^{じゆく}先^{せん}生^{せい}の^の志^しを^を承^{しょう}け^り
所^{ところ}幸^{さい}な^らむ^らが^が頃^{ころ}諸^{しよ}君^{くん}の^の称^{しょう}を^を承^{しょう}け^り

あ^あら^らわ^わせ^せら^れら^れあ^あら^らわ^わせ^せら^れら^れ
冊^{さつ}子^しの^の志^しを^を承^{しょう}け^りあ^あら^らわ^わせ^せら^れら^れ
左^{ひだり}の^の序^{しり}文^{ぶん}に^に思^{おも}ひ^ひを^を承^{しょう}け^り
友^{とも}人^{にん}漢^{かん}商^{しやう}菜^{さい}泉^{せん}子^しも^も同^{どう}じ^じの^の志^しを^を承^{しょう}け^り
久^くし^しの^の時^{とき}の^の大^{だい}の^の学^{がく}に^に甘^{かん}冊^{さつ}子^しを^を承^{しょう}け^り
予^よの^の先^{せん}哲^{てつ}の^の操^{そう}を^を承^{しょう}け^りあ^あら^らわ^わせ^せら^れら^れ
い^いの^の式^{しき}高^{かう}を^を承^{しょう}け^り追^お慕^ぼの^の情^{じやう}を^を承^{しょう}け^り
作^{さく}意^いを^を承^{しょう}け^りあ^あら^らわ^わせ^せら^れら^れ

の代々もみぢよまはなほしし
 四方の省友に同きぐく
 人の文を辨の多りぬ
 古今は不偏親疎を撰ず
 音字が申のさしにかる
 れども知んぬ
 天保九世戊午
 為永替ね徳
 山内しきた

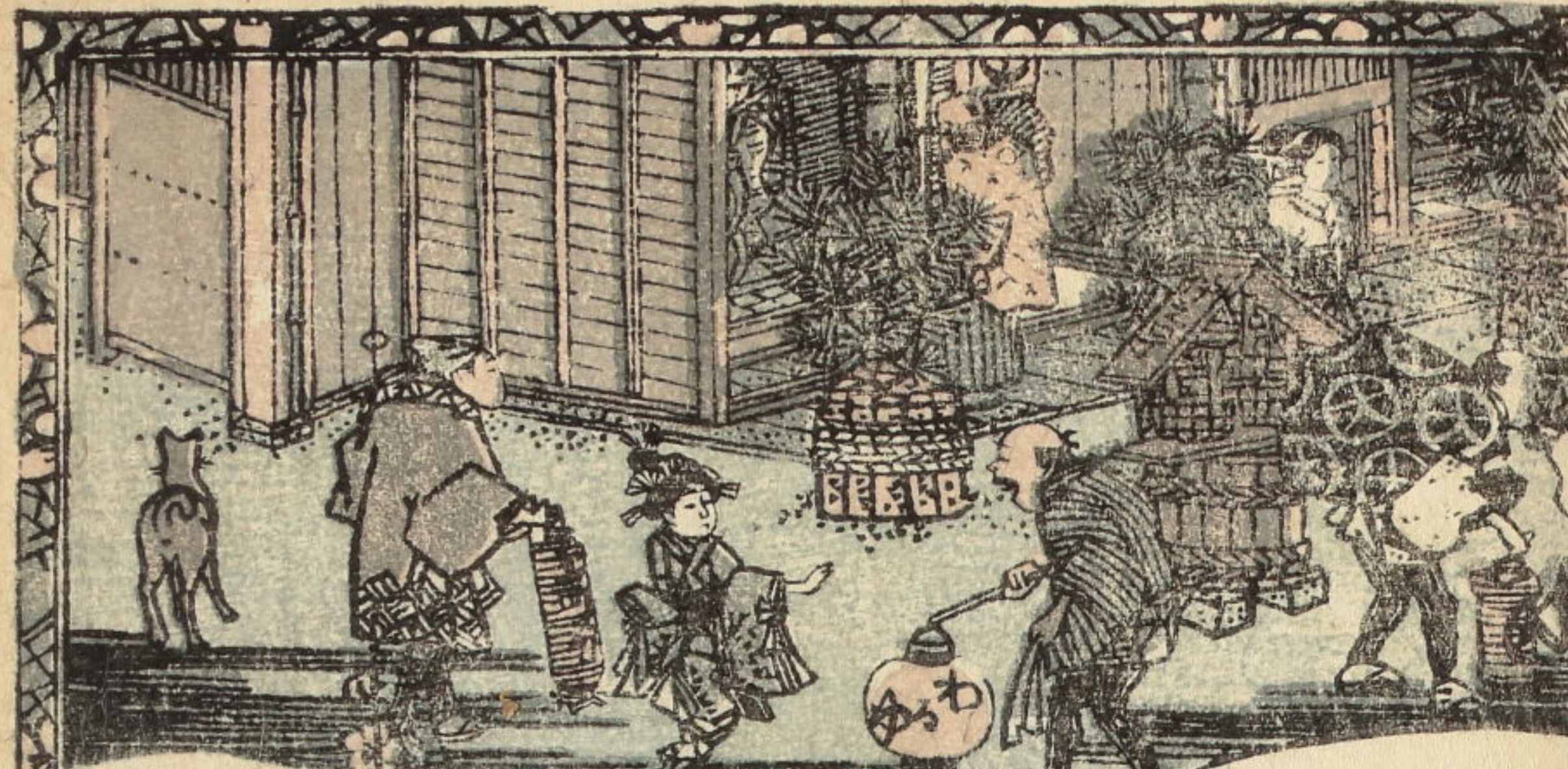
狂割梅之春
 全三冊 歌川國直画
 狂割亭主人作



此の霞の衣帯の人故
 の符もまた大門の花の江戸町
 倉の松もさうまろの徳と見えたるの柳橋の伴氏町

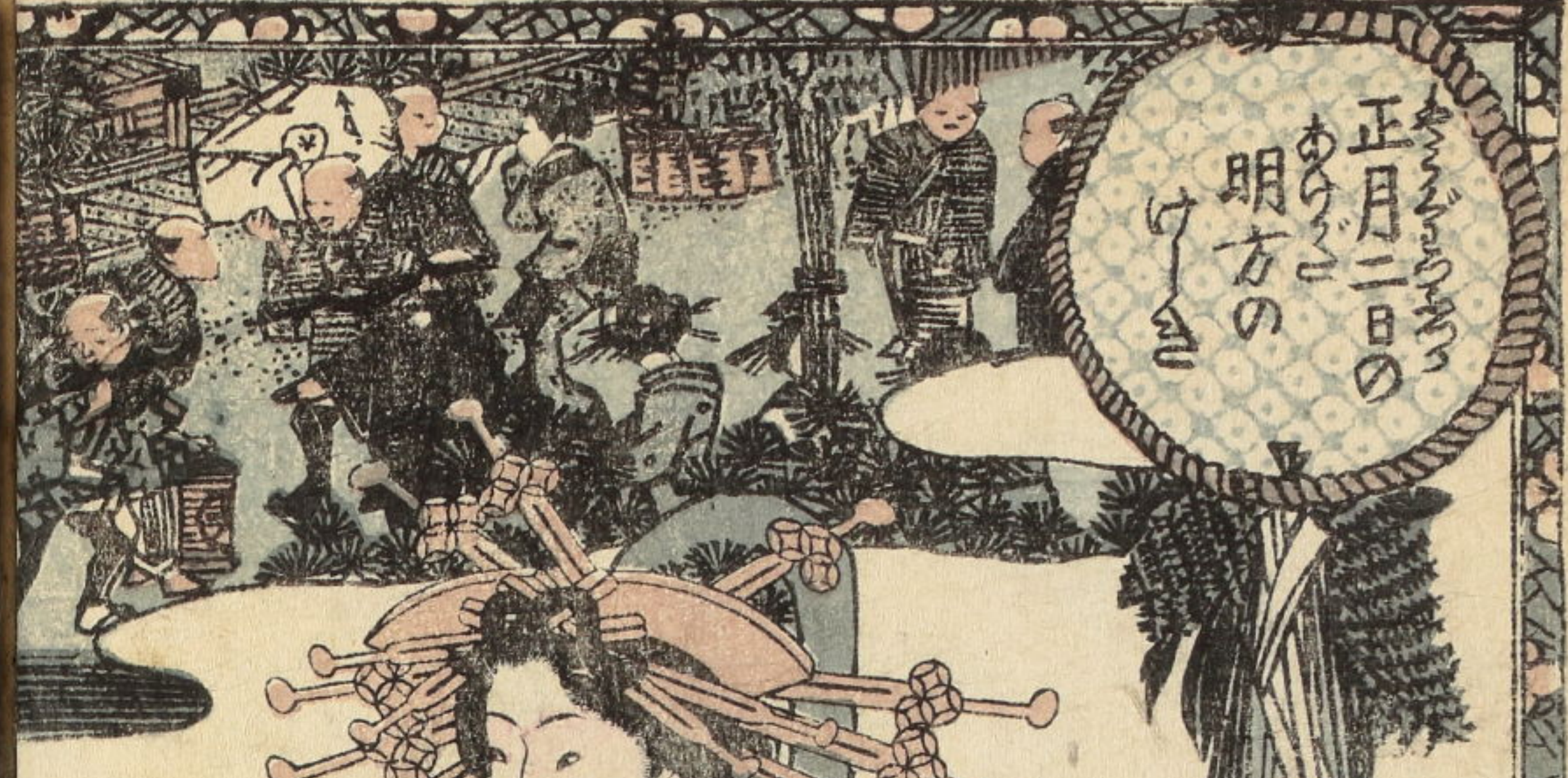


素伯



天保六戌
正月成筆
新川園直

まげま
二日の
わさ
吉春



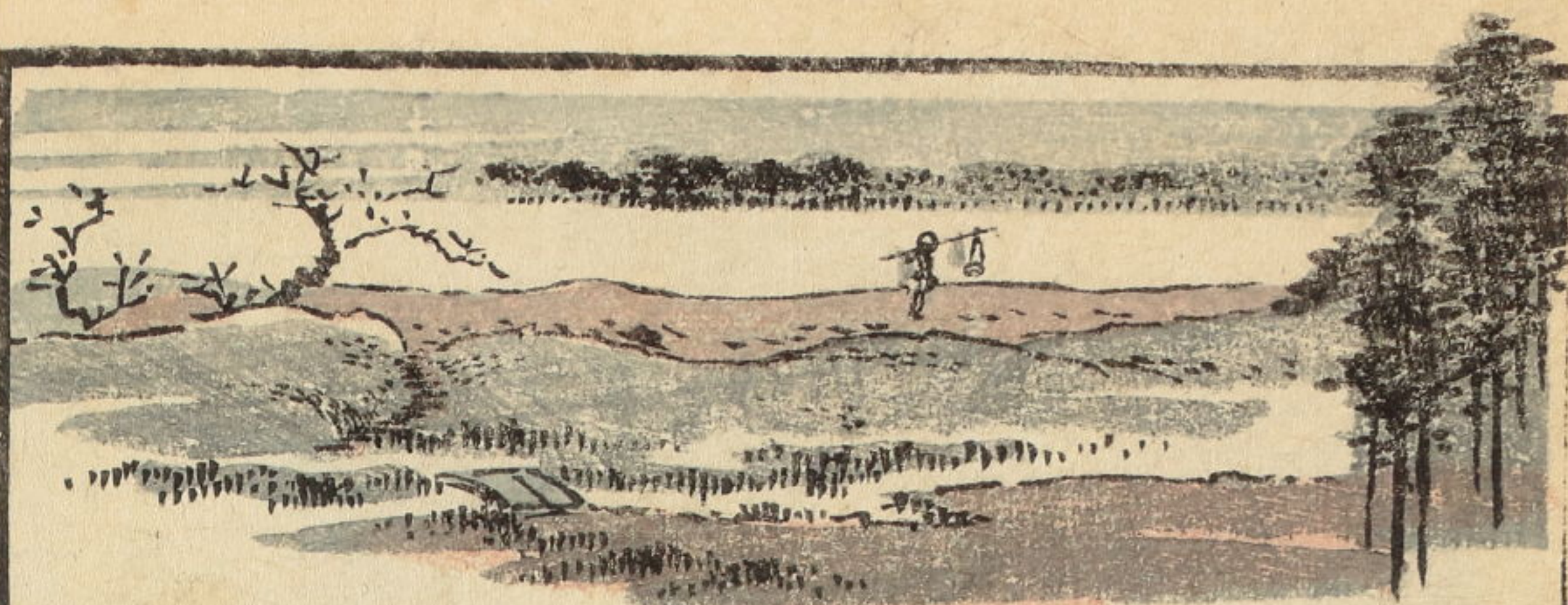
正月二日の
明方の
けしき

元日



松田屋の
全盛
瀬川





梅ヶ香や

た

花柳ゆき

花柳

青少保町

花柳

春鹿

北里元日のけしき入風流きりぬ初巻の衣裳

二日のまきあそびせうりしき体入大勝負の如し

女藝者の宿やに等しき他所のさかむらさき風俗

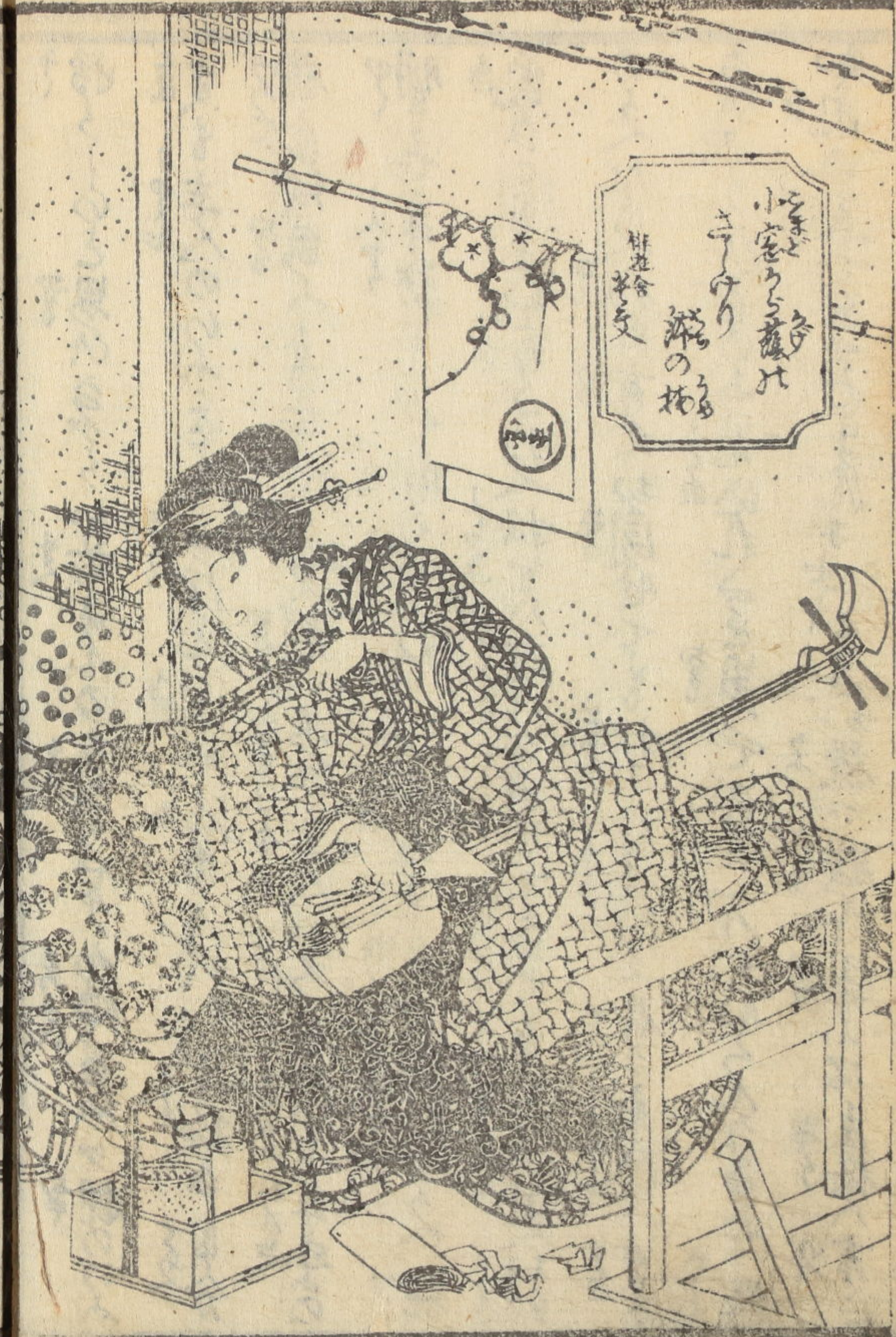
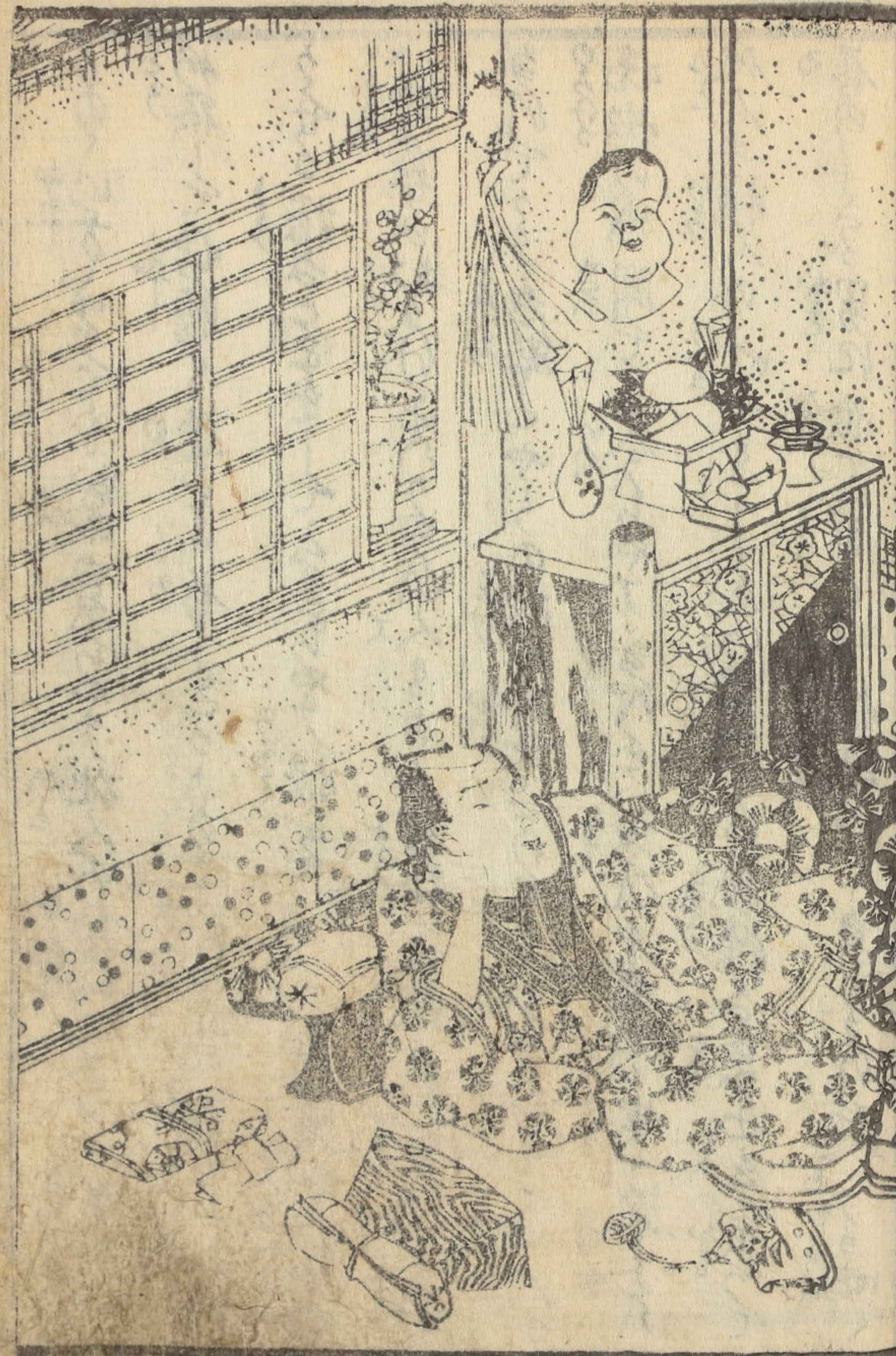
あやかりのまゆみ楼あらし玉のなほゆふ月や今年のはな

車の上と詠し時刻成詩兼て甲を早乙の美人連

る中ふとけり花散深き煙女かお今日を一世の晴とゆ

いもくと星を早乙埋まらばてお春さうらね春さうら白

裏とあがし長屋のうら針糸女さん宅の障子のあけ



小窓うらな
さしり
淋の栞
群遊舎
文

もゆりやりの君あつひ曲輪の仲の町並をながし並せ葛原の松と竹
竹村伊勢 そのまゝの
松本和泉 まゝ
さて西側の窓毎よ唄ひたるはも国葉小園も園葉及音曲八枝
ほの雛置 菊巻 童波常盤津のむ松小富本の吉例の青の足帯
一中節の風流より時常成ゆ類の梅の葉ハ夜清光の當世り男
女の愛者り相よほひりあつる縁ハさ擲て朝日の光照のりりや
柱女屋の移り手りり突かハあまが新造出ハ一松成さるり一全盛盛安
抱ひのは世も凡先せ拂ひはは志旅の布もまよまよとあつる者又

又露番あんぞあ六人づつ 附添のくさも数申さるる 風俗多し 朝に
連ね 松と竹青くくして行敷の如く 多田をまきとせぬ二枚
の駕ハたら買の客引も切らび虎の威を添ハあどがく 連ね連ね
入来るも差万別群集ハいらん方もあり 宴ハ杯の二階をさるる
大黒乗 各寄所とらむける

作者曰大黒乗の昔もあたる一の文のあつひ三十年の昔
次書ハい略して今ハあつひハ行儀のいふ

種々の人情のついでに世をさぐるに實の奥に終を

あつて世のさぐるに春水と雑下るる

暖くうくく女流のたのむに替へたうぐいの梅接ひくさ初

たる早候の外ゆのわうトけ里のうらと女流の初買サ大冬

帝を見まのナゆいんハ雅しくヨイ逢しそ一逢はあうらう

サツサ「あつてふふふうてヨイ玉屋ふくくまのまのあもあうらうや。

あうまのまのうまをドット賞でうらうアサ大冬ん帝を見まの

多アドットあつてのうらう。東酒く。アア白玉のまのうまを大冬

花冬一ゆて賞まんあよ牡丹の花の太史とそ若葉そくハ菊の

花が見まのけ出里人仲次通う。ハ若葉の若葉の替冒

と数ひうてまのうらう。白玉さるぬ血院あうて新替言二幕

曾我村西岸幕下うらうまのうらう。カチくくく

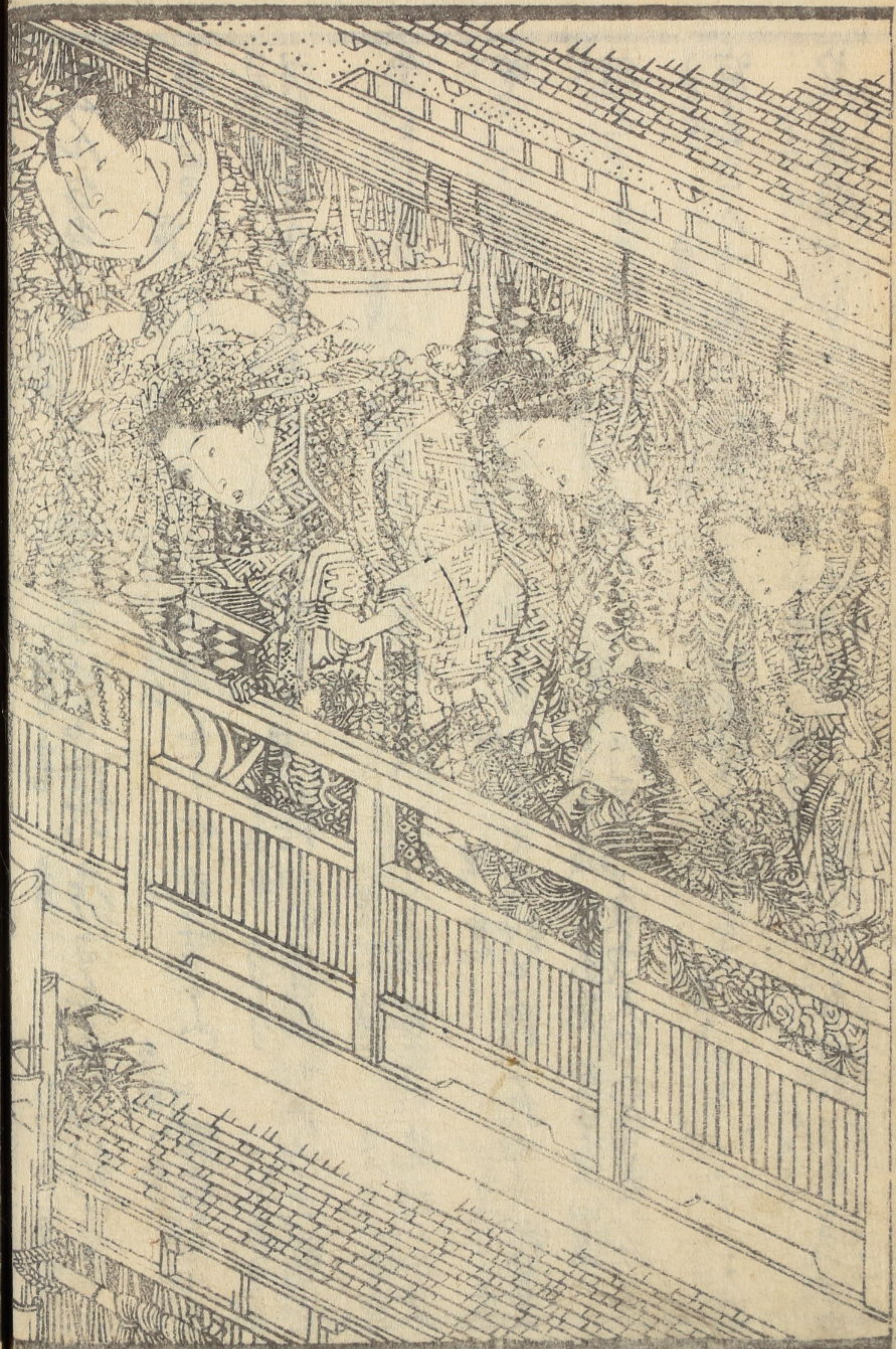
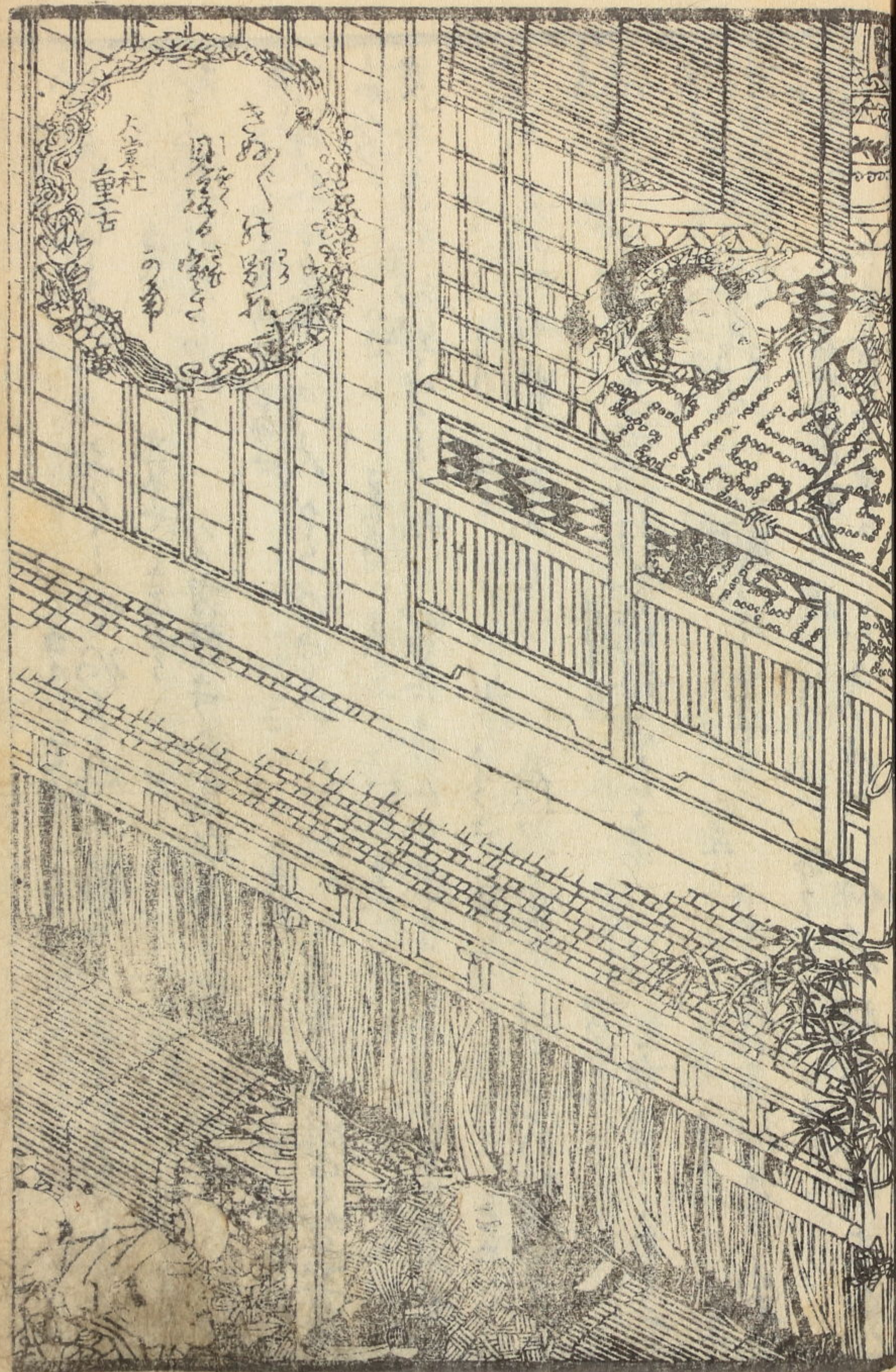
これ 七が替言 とうくまのうらう とうまのうらう 替言す

例の替言

大 草ゆまのちまの あり ちまの ちまの ちまの ちまの

千秋万葉のちまの あり ちまの ちまの ちまの ちまの

ト ちまの ちまの ちまの ちまの ちまの ちまの



たゞ又いふまゝせんヨクムツクもく酒落袋 妻「かまきん例の
洲亦阿るうがてておんるまおヨクムツクもく酒落袋 妻「かまきん例の
笑ひるう二階の上白くも白くも七早くと目も入思ふ
あて居るおろま表の方ゆて商人の夢

と七三三の好終へる次の巻より及巳の段を換て佳境へ入る
梅之春 卷の二

辰記 梅之春 卷の二

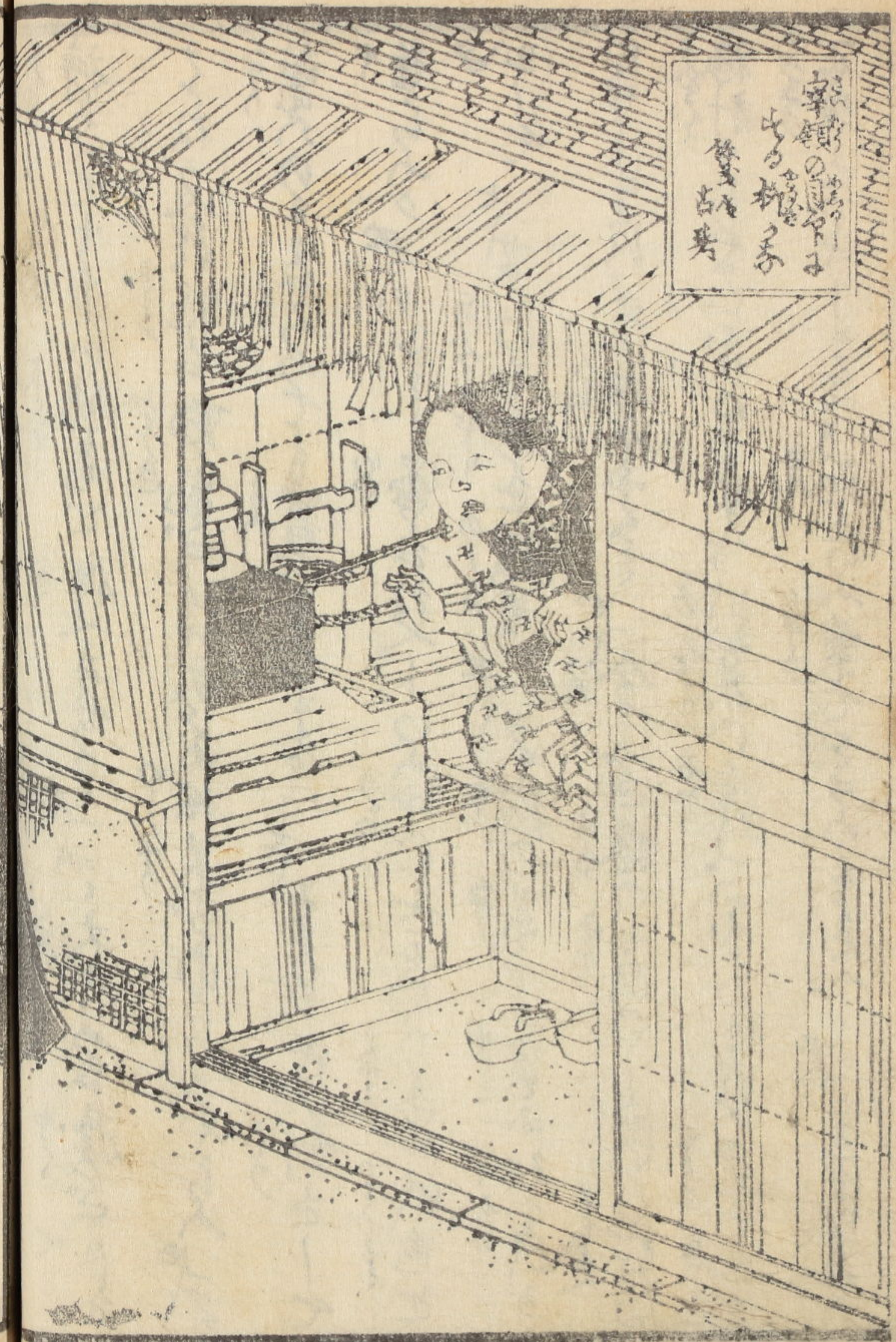
江戸 為永春水著

第三回

咲梅の花の葉の六新造の袖うらまをも濡てるまき 玉「アア大
そよは経身のみする人おまきん自り袋袋持ておまきん
とへまんのりやうらまを根まのめを男の持ててあるものうらま
そよは梅香の根ま自りや伝自りのヲヤシナお茶の葉の袖の
自りちやねう 玉「お茶の葉の根ま接香でてあるものうらま



女法九
十六朝 社代



室鏡の
七の
登古英

よるまじうサカ初ん一ツづくちうり下き給へし 今更らうと
小用場を替て早きうと言て早きうけがたうるを申す小
三階へはまゝいり下りて二階の方へ向て早きう
内うらあはせし言 一お早いもわいんいも早きう早きう早きう
は年とて體で正月あぬうらあはせし言もあはせし言
ちやわいん一腰にきりふを申にちやわいん早きう二階うら下て
初小むい 一ツあ初ん堪まし七かきしヨ今早きうの
けら頼んて常盤屋人進おのこで相後小あうて下階の
お早い

小用小窓つこのぶら一文字屋う人でも早きう 一お早い
室ゆも小用場人あうけを極言次六後ふし七家来が
おんて早きう性ま甘人男・女の入鏡の小用場もねんてへん
男も男も大金を出しと抱へておく他家の首有を我あうて
余りむいぐり元日のことも大概おつて居らア今更らうと
見らぶらうが早きういさうく進屋を七煙草を魚の掃除をはな
がら被さう肉桂と李の實を出して喰あうらあはせし言の
縫上がわこのと他小世世早きううらあはせし言見女の癖ふまうく
お早い



まうんマウのセアリヤク面創るゆんごけ松る小身者が高高高
實實の小身者が高高高の小身者が高高高の小身者が高高高
と載載て火降降の陰人持来来り七才才を入てお辰辰を給松松がアねアうウ
おお茶茶の好む樹合合の多くふ大大骨骨をお辰辰中中のうちの實實の好む樹合合
たたう貴のうちの七七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
のごうう實實の小大大の松をさししの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合

ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合
ままねねがらううの七の松不不苦苦んんがらううの松味味の多くの實實の好む樹合合

振強きは込諸雲の丹練彼甲あても惜まれり
和奇町の圓程小合せり程のよき只場所ぐる小後
らぬ癖はあそび料と核投の町寧ろと入るの温順は
たがぬあそび

○ 層ら里除程るは河重花盛 春祺

○ 短歌やありく強る花のど 素伯

平一もく嬉し何時の同より聯々おまきまうこ子
おも観が村まうえんぞ六 七 八 その答今しごと真河の

東七きんが持てよとて長を成このごりのヲ
利真の東七さん入 七 八 素伯ヨアノ素伯さんの所より
法成このヲとま六のガお赤の方で彼一件の金まが
本振ウノウ 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
情多ふ備らのごころ お客の方でも使客の人であけ
色はなまうても言は甲斐入そのお客は待て居るご子
是眼今月も明日のあかしの遠ひまひヨ 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
卒お出は成らるる頼んで長ねえ幼あは今日と宗

お言の度うが各々の好ぶ好でなほ度まはる子松が
朝方お前様ふ香ぐらまで邪見ふさまるの成おのひ
切ゆるので賃濃暮へと同い度てありき成のや
左振りふけ程も同程ふ敷が同遠つて居るのさ今
ゆも面白ひ人がおまてハイ左振あうとひりまるるも知れ
るひのお本宅二捨てけ地へ来て苦勞を余計おするもの
他人が笑つて居るさういふ事やお前様多うせ其程か
まは度うそお呉成成のでお成度まはるお茶様あそ

廓のおまの勝かううけ地の喫女成の度まをううと賞て
お成成成うううけ度成やアモト松さぶ香ぐらて詮方々お
世結成してお呉成成で度まのまはるそまはるまはる
女のおまのいのがお茶様のお孫ごううけ地の喫女成の中
でもお茶様を同がけて居る奴が二個おうりあるうう油
断が有りませんハセー茶の湯の好むひねのこ奴ごもさ
ばるんぞまの及があつてけ身成相らう知らひひかす人
間並の女并奴成るるバ相おふまのそお呉成成のまはる

取越 苦勞をば蔵か 玉一五 幸極小安目をお言のが覺
教ふ多川てあや物よが 出あるうら 案どらまて ありま
せんハ 傍うしハ 七下 傍うしハ 家初ふ 意をがうて 母れ
まひ けまびりの 小今ふあうて 傍うしハ といふうら 使の 意
人が 出あるうらハ といふと 事入うらハ のス 玉一 せんとも お言を成ヨ
何程で お言様 小い ども 教ままらば 本望ごを 思つて 居る
うら 海所 使ふ 何程さう 男が あらうが 横向て 見極ちや
あー せー とも 使見うらうを 仕極といふ 小紀も ありうら

氣が せいの 極でも 実ハ 集たご ぶら ありハ 七下 七下 せいで せいで
よま 余うは 身給 見下ろし 玉一 八下 左極ちや ありません
ハ 子給と 目給と 付て 此極を 仕まひ ども お言様ハ 見まて せ
お美 成成 せいの といふ 小極を 居まら といふ 小極を ありません
七下 何をの ふう 前後の 言言が 種々 ありません ありません
居ら せいで 玉一 八下 何極せうしハ 自給が 濃 付まて ありません
眉を せいで 濡うし 七下 林あり 極うし 七下 氣まの せいで 七下
希ハ 火降の 灰を 撥あらし 七下 火を 積あらし ありません

今日まどろまろ 日ぐ廻らして居や良む更でも左様
言ひてよとしくうう金ぐおまじくおまさんをはきして
おやせうと歯ふ衣着せ良言を良先刺よりして
春の方ふく不圖しくる七三市の友達彼の使役の
時より真川の藤七様を御入聞うねてまじく
あそびま入ける

第六回

入相の薄ふおろそいで人々散ると物淋しくおろそふおろそ
月のおろそらうある 延生の中旬梅若殿の金佛供養果ては来
の稀おれどおろそ田の波一船列ておろそて苦ふせおろそ
くるおろそ合の中おろそま一人の處女がおろそ後を視るうら
男のおろそけおろそ息を吐て涙をうらら風情はおろそるより
月おろそらおろそら一おろそら者おろそら彼様おろそら
おろそらんおろそらおろそらおろそらおろそらおろそらおろそら
おろそら男の顔おろそらおろそら視ておろそら七三久おろそら
おろそらおろそらおろそらおろそらおろそらおろそらおろそら

らは 餘の
 のののの
 二編目
 ごとく
 せう

おを早

廣は中乃

柳のち

随江會

古春



磯八いそやちきん入き聞ききし言こと 七しちハハタタニニ嘘うそををららうう 四よ放はな題だを
言ことておお前まへをを款くわんくししののぶぶそそままののりりぐぐおお前まへのの実ま家けの
兄あに才さい也やもも多た分ぶんととああるるうううう彼か家けへへ着きてて行いくくのの人ひとト
はは方かたへへ曲まがるるののごご 七しちハハ左ひだり松まつとと姉あねききんんををららううてて此こゝのの兄あに才さい也やハ
ああららううああせんせんハハ 七しちハハ左ひだり松まつととままのの今いまのの実ま家けのの跡あと継ついでハ
おお前まへのの姉あねよよききんんハハ智ち也やももととりりててああるるのの人ひとト
家いへのの弟あにききんんををららううてて姉あねよよききんんハハおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
展ひらききのの日ひヨヨ 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて

易やすくくすすままごごららいい多たくくハハ何なにとと名な号ごうナナ 七しちハハ左ひだり松まつととままのの今いまのの実ま家けのの跡あと継ついでハ
隣となりののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
ままのの日ひヨヨ 七しちハハ左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
そそののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
ははののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
ままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
ままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて
ままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて 七しちハハアア引ひきき左ひだり松まつととままののおお前まへのの町まちへへ買かひひ女めののおおりりて

いふ戸いふのそくそくらふらふけけるるれれ縁縁日日梅梅乃乃の植植木木庭庭の
貪貪りりきき体体とと推推ままるると

一刺 千金 梅之春卷の三

